

第五章

近

世

はじめに

歴史上の時代区分が、政治・文化の変わり目、改革期をもって起点としているからには、地方史、地域史における時代区分も、その地方、地域のを基にすることは、当然許される問題の筈である。特に時代をさかのぼる場合、その必要性はあろう。従って本町史における近世の起点は、太閤検地を伴った蒲生領の時からとしたい。二百年來の領主であった伊達氏も、強力な中央政権の出現により、宮城県地方へ移封され、村々の伝統勢力は大かた移動されたと考えられ、検地の断行によつては、歴史の流れの中で、崩れつつあった中世在家の分解を、更に前進されるなど、村落構造の変容には、近世の夜明けと据え得るものが、容易に窺う事ができるからである。地域史の近世には、郷土の祖先が初めて具体的に登場し、舞台の主人公として活躍するときである。確かに以前にも祖先たちは、此の郷土に生活をきざしていた。けれども具体的に記録に残ることはなく、抽象化と伝説化による公約数の人間像のみが存在しているのであった。それが記録資料にあらわれ、たとえ伝説化されても、生活者としていきいきと登場することになる。然し歴史の現実には常に非情であり、自然現象と人為的な冷酷さの中で、労苦を重ねる祖先たちを発見することが多い。

一地方、一地域の歴史といえども、その中も深さも大きな河の流れに譬え得る。一部分の解明にも数々の関連理解が充分に要求されるのは、そのためである。尠大量とも云える近世村方文書を、意のままに咀嚼して有効に活用することは、至難な業にも近い。本章を期間の短い蒲生領はともかく、上杉領時代を三期にわけて捉え（理解のための配慮として）たが、史資料の残存に厚薄があるため、記述もその枠内に止るのは必至とならう。